

酒法を眞面目に支持するのは酒の密賣業者だけだとさえ言つてをる。不戦條約は何時でも反古にされさうだ。「憐れなる支那四億の民」を救ふ聖戰も中々出来さうも無い

そこで賢明なる米國人は考えざるを得ない政治行動で法律や條約さえ作れば直ぐ理想が實現出来ると言つたやうな朗らかな考は殘念乍ら清算しなければならぬ。さうなると今まで理想のために戦つてゐたと思つてゐたのが誤謬ではなかつたかと自分自身が疑はれて来る。意識的には「自由平等」や「民主主義の安全」や「酒毒の除去」のためであつたが實は、陰然たる動機は利己心の満足ではなかつたかと疑はれて来る。さうなると過去に於ける甘い理想主義は政治の原動力としての力を失ふ。潜在意識を意識形態にまで引き上げさせられた米國民は理想主義の幻を失ふと共に政治に對する興味を失ひつゝある。理想主義を離れた政治は水の無い所の魚のやうに米國民の考え得ざることである。然し、米國民は常識の發達した實際的な國民である。だからこの未曾有の經濟難に遭過してもフアツショの聲を餘り聞かない。否、フアツショも革命も政治行動である以上大した結果を生むまいといふ漠然たる豫感が南北戦争や、歐州大戰や、禁酒法で懲りた米國民の心を支配してゐるのである。然し強いて今までの政治習慣を破壊する必要も無い。だから今度の選舉は誰でもいゝから安全な、そして餘りリーダーシッブの無い人間を出してをかうといふのである。

現代の政治は行き詰つてゐると誰でも言ふ。確かにさうらしい。然し、それだけでは何も説明してゐない。政治は各國皆別個の原因に依つて行き詰つてゐる。勿論その間に共通點は多々あるが具体的には普遍性よりは特種性の方が多し又重要である。

米國の政治の行き詰りは餘りにも天然に恵まれた米國民のお目出度い理想主義の行き誇りである。従つてそれを轉換する道は事實のより正しき認識と、それに應ずる新しい政治手段の發見でなければならない。その出来ないところに米國民の悩みがある。彼らは遂にはそれを切り抜けるか。それが今度の選舉で無いことは確かである。今度の選舉は政治に對する相對的無關心をシムボルとする。そして具体的には過去清算の第一步を踏み出すであらう。過去の遺物の一つである禁酒法は先づ第一に血祭りに擧げられるであらう。その過程は確かに苦しい幻滅の悲哀である。然しそれは必要な過程である。新しい政治手段の發見は古い政治手段の清算を條件とする。

そして新興國、米國が何か新しいものを發見した時に政治は再び經濟や文化と結びつき國民にとつてもつと意義あるものとなるであらう。

私は万事に行き詰つた日本から遙かに、穩かに苦惱しつゝある米國とその政界を興味を以て眺める者である。

明治維新に於ける

商業資本に就て

諸 井 忠 一

(一) 明治維新は、日本の資本主義の發展の爲に、道を開く爲の劃期的な變革であつたのであるが、然しそのは、明治維新は「如何に變則變態であつても、ともかくも、日本のブルジョア革命として認めらるべきものである」と言ふことを意味するものではない。

此れは、表面的に把握せる公式的見解であつて、當時我國には、封建的生産關係に對して、桎梏のみしか感じ得ないところの、従つて、その廢除によつてのみその發展を——資本主義的生産關係の自由なる發展を保証せられた。ブルジョア革命の眞實の擔手、工業ブルジョアジーが、未だ存在しなかつたことによつてその誤謬は明である。

この事は、既に充分批判されたところであつて、今日服部氏による幕末——維新の政治的諸段階の、具体的分拆による絶對王政の指摘は、ブルジョアジーの概念の曖昧、商業ブルジョアジーと工業ブルジョアジーとの明治維新に對する、従つて、その後の明治專制政府に對する役割の明確な區別の欠除が、小川氏によつて發展的に批判されたとは言へ、我々にとつて、研究の出發點でなければならぬ。

(二) 明治維新は、地方分權的な純封建制から絶對王政への轉化であつた。それは、フランスに於ては、ルイ十一世の時に既にその端緒を見、一六一四——一七八九迄の間存在したところの、そしてロシアに於ては、ピーター大帝の時代に存在し、且つ又、我國に於ける大久保利通の如き、絶對主義的政治家メツテルニツヒによつて統治されたオーストリーに於て見受けられた如き、絶對王政樹立の爲の變革であつたのである。

絶對主義とは如何なるものか。それは、封建制度の崩壊過程に於て、没落しつゝある封建的土地貴族と、「伸び上り行く金力」即ちブルジョアジーとの均衡の上に、従つて、その何れの階級も、その相互的力關係に於ては國家權力を自己の手に掌握し得ない状態の基礎の上に、外見上各階級から獨立した形態を持つに至つたところの國家權力である。

此の國家權力は、獨立した自由な行動を、國家自身に興へる爲に「存立する諸階級の各箇を他階級によつて威壓し、それら總ての階級に對して、政治斗争の停止を命じ、それ等總てを自己に隷屈せしめる事が出来る」(カ

ウツキー「フランス革命時代に於ける階級対立」)國家である。然し乍らそれは單に、社會の基本的階級のみによつて即ち土地貴族とブルジョアジーの相互牽制によつてのみ自己を強大にするだけではなく、必要なる場合には、普段に於ては、いかにより多くの租税を取り立てるかと言ふことによつてのみ、政府にとつて興味を感じられるところの一般「人民」を利用する事を忘れないのである。例へばメツテルニツヒは、封建的地主の反抗に際しては農奴をして彼等に襲ひかゝらせるだけの操縦を理解してゐたのである。かゝる「あの面」「此の面」の利用は絶對主義の特徴である。

(三) 而して、かゝる國家は、言ふ迄もなく中央集權的國家である。中央集權的國家權力への發展の基礎は、封建制度の中に於て、發達せる生産力に、即ち商品生産の發達の中に存在するのである。我國に於ても、徳川幕府の封建的生産關係の下に、商品經濟は發達し、市場は形成され、全國的に商業網を確立して、例へば幕末當時に於ける三井組、小野組等は、全國主要都市に多數の支店を持ち、小野組はその數十ヶ所に及んでゐると言ふ状態に達してゐたのである。そして、それら商業資本は京阪地方に集中して居た。それは既に、商取引に於て或は高利貸附によつて、封建的土地貴族に對して優位をしめ、經濟的支配が出現してゐたのである。かゝる状態の下に、經濟的集中に政治的集中が伴ふことは又必然であらねばならぬ。ロシアに於ても、ピーター大帝時代がそれであつたのであるが、既に早く、その商品經濟の發達はピーター大帝時代の程度のもではなかつたとは言へ十四世紀の中央集權的モスコフ帝國の確立の基礎も又そこにあつたのである。モスクヴァ市が交通の要路に當り商業の中心地であつた事が、ロシアの統一を欲したタタールの汗の援助があつたとは言へ、有力な競争者、自由市ノヴゴロドを打ち破つて、統一的獨裁國家を樹立した根本的要因であつた。

我々の研究の鍵は此處にあるロシアに於ける専制帝國が、それ以後廿世紀の初頭に至る迄、所謂「商業資本主義的國家」として如何に商業資本と結びついて居たかは我々にとつて有力な示唆を持つてゐるのである。

(四) 領有的分權的權力に對して、膨大な官吏群と常備軍を持つ、かゝる中央集權的國家權力が、徳川幕府の倒壊によつて、我日本に樹立されたのである。而して、我々にとつては、既に小川氏によつて明確に指摘された如く、絶對王政の發生を、單に「ブルジョアジーの幼稚」と言ふ事によつて基礎づけるだけでは不充分である。それはブルジョアの變革を望んでやまない工業ブルジョアジーが弱かつた爲、心ならずも絶對王政が樹立されたと言ふのではなくして、それは實に、未だ工業ブルジョアジー

に迄發展して居ないところの、商業ブルジョアジーの「心からの要求」であつたのだ。

絶對王政自身は、その膨大な官吏群と常備軍を持つ國家を維持する爲には莫大なる金力を必要とする。それ等の一部は租税收入によつて——それは特に農村にとつて、小農民の貧困と没落を結果した重壓であつた一得たのであるが「國家權力の力は究極に於ては、財産乃至所得ある國家市民の金の齎出にかゝつてゐたのである」そして「國家が益々強くなり、益々富むに従つて、その統治者はそれだけ益々強くなり富んで行つた。今や彼の重大なる課題は、自己が毛を剪らうと慾する羊の繁榮を牧羊者が配慮すると丁度同じ様」(カウツキー前掲)な配慮をすることであつた。

而して、「商業資本の要求する典型的な政治型態は徳川幕府の如き純粹の封建制ではなくて絶對王政である。全國的に統一し、關所を廢し、貨幣を統一し、租税を物納から金納に轉化させて農産物を商品化し、しかも手工業と小農經營とを殘存せしめ得る絶對王政である」(小川氏「明治維新に關する覺書」此處に商業資本と、絶對王政の「結びつき」は必然である。勿論、此の「結びつき」は前掲の引用によつても明なる如く、絶對王政々府が商業資本に同情したが故にではなく「もしもそれが國富の増進に、又従つて國家收入の増進に適應しなかつたならば絶對主義は夢にもそれを思はなかつた」のである。とは言へ、その動機が如何にあれ、商業資本にとつては現實的な、自己の保護助長が問題なのであつて、彼等になされた一連の明治政府の保護政策で充分である。しかも絶對王政の基礎が商業資本の「伸び上り行く金力」に根本的に依存するものであつたとしたならば、狡猾なる彼等商業ブルジョアジーにとつては、單に受身ではなく、能動的に絶對主義を利用する事をよく理解してゐたであらうし、又現實的に此れを利用したのである。「ブルジョアジーは中央集權化された君主制國家の等三身分に、貢納身分となつた。而して、己れの全力をば貿易及産業の發達の爲に國家機構の利用に向けた。その先頭には財産ブルジョアジーが立つた。彼等は自分の扶養してゐる宮廷貴族と共に、實際上に絶對制をば自分の武器に變じてしまつた」(リヤザノフ評註より)

(五) 従つて服部氏が、「幕府崩壊過程の基本的作爲者は彼等全國の商業—金融資本であつたが、それにも拘らず彼等は全封建的支配体制の崩壊を決して望んだのではなかつた」と言はれ乍らも、「京阪の金融貴族が慶應三年王政復古と共に新政府の財政保護と成つた事は、確に命がけの飛躍であつたに違ひない」と述べられるのは此の點の、即ち絶對主義の積極的支持者としての商資本業に就ての理解の曖昧にあつたのである。彼等は確に全

封建體制の崩壊を望んでゐなかつた。然し純封建的體制の崩壊は望んだのである。此の事は次の事を見ても明かである。新政府の金穀出納所の調達方を引き受けた小野組三井組島田組は、「大藏省の金庫として、地方から納まる諸税金を無抵當で領り、且つその出納事務を取り扱つてゐた」それ許りではなく、「その支店のある地方の道路橋梁の普請、廳舎の建造等は總てその請負となつて居た殊に當時は政府に會計検査の制がなく、その取締りが非常に寛大であつた爲に、小野組も三井組も自由に國庫金を流用して各種の事業に投資する事が出来た。小野組では、維新後從來の營業の外に鑛山、米穀の方面にも手をのばし」（白柳秀湖氏日本富豪發生學、支族財權爭奪の卷一〇〇頁）てゐたのである。かゝる利益を得る所の金穀調達に、彼等にとつて命懸けの飛躍であつたのではなく、「又「政變は二三門閥資本家にとつてのみ最有利な投機」であつたのではなくて、寧ろそれは、彼等の心から期待するところであつたに違ひない。

(六) かくの如く、新政府と商業資本の結びつきは極めて密接であつた。そして既に述べた如く「羊の繁榮を牧羊者が考慮する」必要の爲に、新政府によつて一連の開化政策が遂行された。「開化」は絶対主義の特徴である「維新政府の實質的主腦部は政權を獲得して、改めて國内の全問題を自己の問題としなければならなくなつた瞬間から、否應なしに、或者はより進歩的に、他の者は抵抗の後に必要に應じて、何れも開化せざるを得なかつた」（服部氏明治維新史）のである。従つて、國富の發展の爲に、換言すれば商業資本の發展の爲には、地方の藩に於ける「勤王」藩士による外人殺傷事件は、新政府にとりては困りものであつた。

土地賣買の公認、貨幣の統一、關所の廢止、商法司或は外國貿易を目的とする通商司設立等の開化が行はれた通商會社爲替會社には多額の太政官札を貸下けられてゐたのであつて「創立の際の貸下額は、東京横濱西京大阪神戸の各爲替會社合計一六二千兩に上つた」（風早氏「財政史」）又鐵道電信航路の完成への努力は政府によつてなされた。それは内亂鎮壓の目的もあつたとは言へ、尙商業の利益に副ふものである。航路の問題は、租税が未だ金納でなく、米納であつた當時に於ては、船舶業者にとつては多大の利益をもたらしたのである。而して商業資本にとつて利益ある政策はそれのみではない。内地市場の狹隘、それは農村を搾取することによつてのみ、その發展を保證された日本資本主義にとつて特に必然であつたのであるが、その爲にも市場の開拓は、我が商業資本にとつて切烈に要求されたのであつた。此の必要の滿足の爲、明治七年の台灣征伐等の「開拓」はなされたのである。前資本主義的自足的經濟の中にあつた當時の

台灣に於ては、「台北に於て五圓卅六錢三厘の玄米は、嘉義に至りては三圓廿錢となり、台北にて卅七錢四厘の石炭は嘉義に至りては一圓となり」且、「もしそれ商人が農家に對する取引に至りては殘酷を極む。即ち商人は年内に發賣すべき茶、若くは樟腦、米を抵當として、農家に農業資金を貸與するの方に於て、一度此の貸借關係を生じたる時は、農家は終生其の桎梏を脱する能はざるものなきにあらず」（矢内原忠雄氏「帝國主義下の臺灣」一四〇頁）の狀態の下に、英米及清朝治下の支那商業資本によつて畧奪はつて置かれてゐたのであつた。

殖民地の征服、劫掠の「牧歌的行程こそ本來的蓄積の主なる要素である」（資本論）。そして我々はイギリス商業資本のインド收奪に於て、それを明に知る事が出来るのであり、我が商業資本にとつても、それは蓄積の大いなる要素であつたのである。侵畧は軍備を、武力を必要とする。そして此の事こそ、その後にも、軍事的勢力を華々しく政治的表面に押し出した。従つて、我國に強烈なる軍國主義的性質を附與した要因であつたのである。そしてこれは、現在に於ける我國のファシズムの「先導體」に關して、極めて暗示深きものを提出して居るのである。

此の征討費に要する費用は、將來の莫大なる利益の前に商業資本によつて、「借上金」等の形にて喜んで提供されたのである——しかし、尙、高利を附することは忘れないで——。

(七) 最後に、幕末に當つて、我國の商業資本の全部が徳川幕府の倒壊を望んだかと言ふに、決してそうではない。當時に於ける外國資本特に英米資本は、明治維新に當つて大いなる役割を演じた。「幕末維新の政變は、外交方面より觀察すれば、英佛の東洋に於ける角逐と言ふべく、幕府の背後に佛蘭西あり、薩長の裏面に英吉利あり、兩者虚々實々の外交は、佛國公使ロツシュと英國公使パークスの腕比べも目すべきこと……」（尾佐竹氏國際法より見たる幕末外交物語増補「徳川幕府と佛國との密約に就て」）而して此等の事は、「江戸城明渡が平和裡に行はれたのは、佛國東洋艦隊の横須賀造船所を占據した事が、英吉利公使を牽制し、延いて西郷の決心を鈍らせたのが原因であつた……」（尾佐竹氏前掲）と言ふ現象を生ぜしめたのであつた。従つて、商業資本の間にも、小川氏が指摘されて居る如く、英資本と結んで絶対主義の樹立を望んだものと、佛資本と結んで徳川幕府についたものがあつたことは明である。そして此の争は、英資本の、換言すれば對徳王政支持の商業資本の勝利を以つて終つたのである。従つて、一部の商業資本が幕府と結んだからと言つて、その事は歴史的任務の上から言つて、全體としての商業資本が「維新の變革の積極的作爲者であつたと

言ふことを、何等さまたげるものではないのである。

1932、6、20、

農業的生産過程の 特殊なる本質に就いて

樋口 俊 雄

他の如何なる理論的領域よりも農業理論に於ける反マルキシズムの烽火は過去に於ても又現在に於ても盛んに熾烈しつゝある。中にも修正學派のアキレスたるエドワード・ダヴツドが過去に残した農業理論は、凡ゆる批判に堪へ得るものとして、反マルクス主義陣営内に重きをなしてゐるやうである。

本論に於てダヴツドの“Das besondere wesen des landwirtschaftlichen Produktionsvorganges”に展開された彼の理論の批判を進めたいと思ふ。茲に叙述されるところのダヴツドの思想は彼の理論的構成の最も重要な部分と思はれる。

ダヴツドは茲では先づ労働要具及び労働對象に就いてのマルクスの定義は農業に當てはまらないことを述べるのであるが、何故ダヴツドはマルクスが労働過程に與へた概念から問題を進めねばならなかつたか、彼は此の問題に入る前に即ち前のパラグラフの最後に次の如く書く。

斯く（社會民主黨の——譯者註）綱領に矛盾せる小農民經營の狀態を説明するために、農業的生産過程以外に存する種々の理由がさまざまに求められた。そして農業生産自體の特殊なる特徴に存する決定的理由を求むると云ふ最も明瞭なる考へには當時のものは及び至らなかつたのである。これマルクスの生産分拆の權威が妨害となつたからである。（原書四一頁）

此の言葉から理由は明白である。即ち農業領域に於ける大經營の發展せざる根據を農業生産の特質の中に——此の特質が重要な問題を含む——見出さねばならぬと考へ、そしてそのためには彼の形而上學的な農業の特殊性を構成する前提としてマルクスの労働過程に與へた概念が問題とされたのである。本論に進もう。彼は謂ふ。

「一般労働行程を理論的に分拆する場合に於ても、或ひは生産行程が協業、分業及び近代の作業機及動力機などの影響によりて蒙る、その形態の變化を徹底的に記述する場合に於ても、マルクスによつて農業的生産過程をその特殊なる特徴に於て把へることは試みられなかつた。

此の場合、マルクスは暗黙の間に農業と工業とに於ける生産行程は本質的に同一であり、従つて工業生産の分拆によつて發見せられた處の小經營が大經營に至る進化

の傾向は農業的の財化生産に對しても當はまるものであると云ふ前提から出發した。』

マルクスは暗黙の間に農業と工業とに於ける生産行程が本質的(!)に同一であると見なしたと彼ダヴツドは謂ふのであるが我々はダヴツドに答へやう。馬鹿を云つてはいけない!と。私は此の罵りの言葉が單なる興奮の言葉でなく、當然ダヴツドに投げらるべき言葉であることを説明しやう。

マルクスが農業生産をも工業生産と同一のものとして見る場合は、農業生産物が商品として、かゝる經濟的範疇から觀察する時に、區別さるべき性質でないことを云ふに過ぎない。即ち農業及びその生産物の工藝學的な、換言すれば生物學的生産行程が工業の場合と同一であると言ふのではないのだ。だからマルクスも言ふのだ。

「實際茲では（餘利利潤の地代化、即ちマルクスの地代論——論者説）農業及び、その生産物に獨特な一現象は問題となつてをらぬ。むしろ商品生産及びその絶對的形態たる資本制生産の基礎の上に於ては、他の凡ゆる生産諸部門及諸生産物に就ても同じことが言ひ得る。』

もしも工藝學的意味に於ける農工兩生産領域の生産過程が同一であるのであればもはや、農業生産とか、工業生産とか云ふ特殊な概念を設ける必要がないではないか!此兩生産領域に生物學的特殊性が存することは理論を待つ問題ではない。従つてマルクスの次の言葉に對する我々の理解も亦農工兩生産の工藝學的同一の問題としてゐるのではないと注意しておく。

「農業も亦製造業と全く同じく資本制生産方法に依つて支配されると言ふこと、換言すれば農業も亦資本家達の手で經營されるものであつて、農業上の資本家達を先づ他の資本家達から區別するものは、彼等の資本を、それによつて運轉される賃銀労働とが投ぜられて行く要素のみだといふこと。我々から見れば小作農業者が小麥、その他を生産するのは、これ恰も製造業者が絲又は機械を生産する如くである。」

マルクスの此章句に於ける最後の言葉はダヴツドの所謂マルクスは暗黙の内に農業と工業とに於ける生産行程は本質的に同一であると云ふ風に一見誤解されがちである。然しながら、マルクスの意味するところは同じく商品として生産することに變りがないと云ふその點にあるのである。

マルクスは經濟學批判序説中に「生産は常に特殊な生産部分であり、或ひは一つの總體である。——しかしながら、經濟學は決して工藝學ではない」と書く。エンゲルスは同書を批判して次の如く書いてゐる。「經濟學は物を取扱ふのではなく、人と人との關係、結局に於て階級間の關係を取扱ふ。この關係は物と結合して居り、且